# 市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付け 0797(32)1131
第5号 87／4 市芦救援会 発行人 玉本 格

一九八七年三月二七日精道小学校講堂前にて市芦分会抗議のハンストに入る

もくじ

**特集・強制配転撤回闘争**
生徒切り捨てから教師の切り捨てへ 市芦救援会事務局 … 2
3・31総決起集会報告－強配者六名の決意表明
玉本 格 … 8 麻田 利子 … 9 石橋 幹夫 … 9 滝山 昌彦 … 10
小川 文夫 … 11 吉岡 治子 … 12 森村 啓一 … 13

特集・強制配転阻止闘争

# 生徒切り捨てから教師の切り捨てへ

市芦救援会事務局

市芦分会は三月二七日正午を期してハンガーストライキに入った。生徒定員枠内で三十三名にも及ぶ不合格者を出した市教委・管理職に抗議するものである。合わせて遅からずかかってくる強制配転攻撃をも視野に入れたものであった。

市芦分会の総力を挙げたハンスト突入に挑戦するかのように、芦屋市教委は二八日正午、前記六人の教師に対して強配攻撃をかけてきた。強配を予測しながらの市芦分会の闘争態勢が、この異常な強制配転攻撃を持ちこたえることができた。

当該者六名の教師の激怒は勿論、支援の坐り込みを行なう仲間の間にも人を人とも思わぬ市教委・管理職のやり口に闘争心が湧き立ち、短い日時しか残されていなかったが、あらゆる知恵と労力が結合して運動が展開されていった。市芦から放逐される者、市芦に残る者と、市教委は組合に楔を打ち込んできたが、この数日間の強配阻止闘争はあらたに分会の結束を強めるものとなっていった。

私たちは、大量不合格者攻撃から強制配転、そして市芦つぶしの現状を報告し、救援会運動のになうべき課題をここから汲み取り、相互に確認したいと思います。

## 強配者及び配転先

**麻田利子**（体育）市教委学校教育課。そして兵庫県教委体育保健課へ一年間の出張研修。

**石橋幹夫**（理科）市教委同和教育課。そして上宮川文化センターに学力促進学級担当で出向。

**吉岡治子**（美術）石橋さんに同じ。

**森村啓一**（英語）市教委管轄の芦屋市図書館。

**小川文夫**（社会）市教委学校教育課。そして市教委管理のみどり学級（肢体不自由児の学外障害児学級）担当。

**滝山昌彦**（社会）市教委社会教育文化課。そして、市民センター内にある文化財担当。

## 定員内で大量三十三名の不合格

芦屋市教委と校長前田、教頭井上は、定員一四一名のところ一三四名が受験した中から三十三名（一クラス分に相当）もの生徒を不合格にした。「公立」高校で定員の枠内にもかかわらずこれだけ多くの生徒が足切りされた例はない。三十三名の中には、本誌でも紹介した三田谷治療教育院の障害者N君も含まれている。進学保障制度（被差別下の生徒の



学習権を保障するため中学校の推薦を受けて定員の枠外で入学許可する制度）の枠内で受験した八人の内、N君も含めて、四人が切り捨てられたのである。

三十三名の不合格は、その多さにおいて〝市芦つぶし〟を企図しているだけではない。市芦が目指してきた、諸階層の困難な状況から発せられる教育要求に応えてきた教育活動を根底からくつがえそうとするものである。「低学力」と位置づけられ放置されようとした者、障害ゆえに高校教育から疎外される者、家庭の経済的状況ゆえに高校から身をずらそうとした者たちに、字義通り「教育の機会均等」を保障することをになってきた市芦の存在性を奪うことにつながっている。

地元解放同盟、中学校、市芦が守り育て、市教委自身も容認してきた進学保障制度に象徴されている高校全入の思想の下、諸矛盾を引っ下げた生徒たちが急峻な坂道を縫って学校にあがり、生徒どうしがぶつかり合い、価値観の激闘を乗り越えて生徒たちは成長し又、豪邸の並びをおりていた。こうした生徒相互、生徒と教師、教師間の激しく、厳しい批判の存在が〝芦屋の教育〟を健全に保っていたのである。

松本教育長は、口をひらけば「一人一人を大切に」、「点数成績で生徒を判断しない」とまことしやかに発言してきた。しかし、三十三名もの大量不合格者を作り出したことで全て虚言であると自ら暴露した。「勉強できない生徒は高校に来るな」、そういう子供に金をかけることはないという効率主義・能力主義に貫ぬかれた「教育改革」を宣言したに等しい。特定階層の、特定の価値観に限定された「一人一人を大切に」する「教育改革」を強権的に実施したということである。

この暴挙は、極めて恣意的な入学者合否判定によって行なわれた。市芦で従来から行なわれている全教職員による会議では強行突破できぬと見た市教委は、校長を指図して数名の合否判定委員を任命し、合格発表前夜（一九日）各委員を校外に連れ出し、一晩軟禁させた。そこで、合否に無関係な「関係機関作成」の資料が駆使され、恣意的な判定が行なわれたことは推測に難くない。それを裏付けるように、委員一人ひとりに「一切を口外しない」という誓約書まで書かせ、恫喝を加えているのである。三十三人は、この闇討ちによって切り捨てられた。こうした恣意的判定は、進保制度で受験した障害者どうしを切り裂いている。合格した生徒は「あの子が落とされて、私は合格しても一つもうれしくない」と言っているのである。

## 管理職　校務放棄の逃亡で学校は大混乱

校長前田、教頭井上は、三月二〇日の合格発表に際しても職員全体に対し合否判定基準を公表せず、大量不合格者の結果のみを貼り出させた。その直後から市教委幹部ともども逃げまわった。

合否判定会議での検討内容・基準が校外に持ち出されることはどこの学校でもなされていないが、教職員が判定基準を確認した上で生徒を受け入れることは職務上最底限のことである。入学者受け入れ、その後の指導は全教職で当たるのであるから。この当然なすべき職務さえ放棄した管理職を、市教委はかくまった。

合格者発表で、三十三名の大量不合格を知った芦教組、同盟、そして市芦分会はただちに抗議行動を組み、二〇日夕方、市教委北側の精道小学校前で「大量不合格撤回」集会を持ち、一斉に市民向けビラまきを開始した。合わせて、市芦分会は五項目要求を掲げた抗議文を突きつけた。――①定員内大量不合格者を出した理由を明らかにせよ。②合否判定基準を全職員の前に明らかにせよ。③合否判定委員に対し強権的に署名させた「誓約書」を直ちに破棄せよ。④進学保障制度の精神に則り、進学保障生徒のうけいれを認めよ。⑤本年一月二一日付けの兵庫県教委教学第五七

一号通達に則り、定員を充足し、三十三名の補欠入学を認めよ――。

二〇日に姿をかくしたままの校長前田、教頭井上は、二三日の修業式にも学校に来なかった。管理職不在、職場放棄ということで式も行なえず、生徒、父母の間に強い批判がおこった。とりつくろいようのない無様な仕儀を、教育長松本は校長前田を記者会見に連れてゆき、すり抜けようとした。そして、修業式にも出なかったのは「校長が体調を崩し、教頭も学校へ入れなかったためで職場放棄ではない」と弁明したのである。事実は、二三日の修業式、早朝校門前での同盟青年部・子ども会による「進学保障つぶし」の抗議行動を現認して、責任を持って対処することにおいて無能だと悟り、あがってきた坂をまた引き返し、市教委にかけ込んだのである。その後の対策結果が急拠しつらえられた記者会見による弁明である。

市芦管理職の職場放棄は市教委の対応をそのままに反映したものである。同盟青年部・子ども会による市教委抗議行動の中で発せられた「いつまで私らみたいな高校行かれへんかったもんをつくったら気が済むねん」という母親の叫びに対して、市教委幹部は話し合いを一切拒否し、逃亡を続けてきたのである。そして、市芦と同じく芦教組に対しても内示を含む一切の手続き無視の強制配転を強行し、当該者、芦教組の抗議に居直り、幹部は逃走をするという対応であった。

## 強配阻止闘争をにらんで抗議ハンストに突入

二六日、市芦分会は自分たちの眼の前で行なわれる生徒切り捨て、十数年かけて積み重ねてきた教育遺産の破壊、組合運動に対する攻撃に抗して、ハンガーストライキに突入することを決めていった。二七日から一人二十四時間のリレーハンストで一人ひとりの抗議の意志を身をもって表明する闘争態勢を選んだのである。又、この闘争戦術には、生徒切り捨てと同時に早晩かけられてくる教師の定員削減に絡らんだ強制異動に抵抗する態勢堅持の意味も込められていた。今を十全に闘うことが、敵の攻撃に対してしぶとく、果敢に闘いきることであるという確認が一人ひとりの中にあったのである。

市芦分会がハンストを決行するというニュースはたちまち県下に広がり、多くの支援物資――寝袋、毛布、坐布団、テント――が小型トラックに積まれ、市芦に届けられた。そして、二七日正午、市教委北側に隣接する精道小学校前――道をはさんで芦屋市役所――で二名の組合員によるハンストが始まった。その周辺には市内・県下各地から多数の教師・労働者が共に坐わり込みを展開した。会場に「ハンスト決行中」と墨書されたのぼりがひるがえった。ここはにわかに活気づき、組合旗、のぼりの舞う市役所前を通りかかる市民の間に、異形の集団を見る視線が走った。

一方、市教委と市役所の間に浪藉者を追っ払えという伝単がやり取りされた。精道小学校校長・教頭がその伝令者となり、小官吏の面を下げて退去要請を持ってきた。坐わり込む者たちの「出なおして来い」、「お前たちの教えた子どもたちが理不尽にも不合格にされとるのに何とも思わんのか」という抗議の声に、市教委の下僕になり下がった男らは抗弁の一つも出来ず、「ともかく止めて欲しい」の言葉を繰り返すのみであった。退却命令をはねかえし、夕方まで貫行した抗議集会を市芦にあがり続行したのである。

## 〈労働者の連帯〉をうむ闘争態勢

ハンスト二日目、二八日昼、六名の市教委への強制配転が知らされた。勿論、本人に対する意向打診が、事前に校長前田からあったわけではない。市役所庁内の掲示板に他の異動と共に強配人事が公表されるという最初から異常なものであった。



強配のニュースを聞き駆けつけた仲間と共に、すぐさま抗議の立て看が作られ、「強制配転阻止」の大垂れ幕が校舎にかかった。その横には六畳分もあろうかという「団結旗」がひるがえり、校門前のハンスト周辺はにわかに闘争本部の様相を呈した。校門前から校内奥に続く五分咲きの染井吉野が、異形の者らの〈祭り〉を待ち受けている。

次々とかけつけてくる支援部隊との哄笑、疲れをいやす仮眠、この十数年間の市芦での己れの取り組みを振り返る坐わり込み、様々な分会員の姿がそこに現出した。仕事を終え、市芦に上がってくる卒業生らも夜更けまで続く〈祭り〉に参加し、ハンスト決行者らを連日励ましていったのである。

二九日は、日曜日にも関わらず、県下各地からの支援者を混じえた決起集会が持たれた。そこで六人の教師の決意表明を受け、集会参加者は街頭宣伝カーを先頭に逃げまわる校長前田、教頭井上宅、及び教育長松本宅周辺に抗議のビラを各戸配布したのである。可能な限りの知恵を絞った闘争戦術がとられた。

そして、三十一日、明日辞令交付がなされるという日、再び山をおり、精道小学校前に集結して〈祭り〉＝闘争の総括集会をひらいた。そこで、「市芦は内外に裂かれたが、なお、それぞれの場所に踏みとどまって闘い抜く」という決議が力強く宣言されたのである。

市芦分会が抑えきれぬ怒りの発露として選んだハンスト決行に寄り合った者たちに、この数日間がなげかけたものは多々あった。ある一つの具体的な闘争は夫々環となってつながり、その中に私の闘いがあること、そこに、真の意味で「労働者の連帯」が具現化されるということを、市芦への急な坂道をあがり、さがりしながら反芻し続けたであろう。個別にかけられた攻撃によって生起する口惜しさ、憤怒、辛さを包み込む〈労働者の連帯〉、これをある者が〈祭りが始まった〉と称したのだが、為政者には作れぬ我々の武器が今だなお健在であることを見事に証しだてたのである。

## 異常づくめの六名の教師の強制配転

四月一日、一〇時から職員会議、十一時から市教委で六人の辞令交付式が予定されていた。市芦校門前には早朝から四名の私服警官が「校長から警備要請が出ている」と称して会うことをおそれ、辞令交付式の始まる十一時に合わせて、一方的に職員会議をずらす旨の電話を市教委内から学校にかけてきた。校長前田は、最後の最後まで六人の教師の意向を聞かなかった。

市教委での六人に対する辞令交付式は、教育長松本欠席の中、他の異動と分離して行なった。そこで市教委・小林管理部長は「人事異動の趣旨説明はしない」と居直ったばかりか、市教委・同和教育課に強配され、さらにそこから市長事務部局に出向（所属長が変更する）され、上宮川文化センター勤務の辞令が出ている吉岡先生の「午後二時～十時」という勤務場所への配転は重病の父を抱え、自分も療休を繰りかえしながら働らいてきた者に対する退職の強要であるという趣旨抗議に対して、「異動について人権問題は関係ない」とまで放言したのである。

滝山・森村先生は七年前に続く二度目の強制配転である。この時、市教委自身異動の誤りを認め、一年間で現場に戻している。しかも今回滝山先生については、七年前と全く同じ部署に強配をしている。市教委が如何に理屈をこねようとも、両者に対する配転の正当性、適正さは立証されるものではない。唯一、二人の教師を飛ばさねばならないという決定が先行しているだけの配転である。

麻田先生について、市教委は県教委・体育保健課へ一年間の研修出張を命じている。八八全国高校総体を中心とした事務補助のためだという。市が給与を出し、一年間毎日出張命令を出し、交通費を支給して行った先の体育・保健課では県の仕事を手伝えというので

ある。市のための研修出張と言いながら、芦屋市の公金を使って、県の職員を一人雇ったことになるのである。事実、麻田先生に当てがわれた仕事は、県のアルバイト職員がやっていたことである。県教委は、わざわざそのアルバイト職員を馘首し、年間一二〇万円の金を浮かせて、麻田先生の強配の受け皿を作ったのである。市費の使用法、研修出張の内容、市教委に配転した者をただちに外へ放出すること、いずれの面からみても、報復以外の何ものでもない。

石橋・吉岡先生についても、市教委に強制配転しながら、さらにそこから出向で外へ放り出している。これ一つとっても、二人の先生を学校現場から切り離して市教委に配転しなければならぬ必然性が皆無である。唯一、市芦から放逐しなければならぬという行政上の理由のみが存在しているのである。

二人の市教委から上宮川文化センターへの出向は、同時に市同和行政見直しの一環として出てきている同和予算削減と絡め、これまで現場教職員がそれぞれの主体性に基づいて部落出身生徒の学力促進学級に関わっていた関係を阻害し、この学級での蓄積を現場に還流させるという重要な意味を剥奪しようとするものである。二人を市芦から切り離して主に担当させるのであるから、必然的にそうした狙らいが秘匿されている。

一方、学力促進学級担当の辞令を発令していながら、その勤務態様はどうなのか、誰れが所属長なのかも不明確極まりないものであった。このアイマイさの中で、両者に対し午後二時から一〇時の勤務時間が押しつけられようとしたのである。明らかに吉岡先生が抱えている父の病気、自身の病気という困難な条件を承知した上で発せられたもので、退職強要そのものである。

小川先生については、みどり学級という重度の肢体不自由児を受け入れている障害児学級（小・中学校外に置かれた障害児学級）の担当だという。そこで、乳幼児の機能訓練を行なえというのである。小川先生は社会科の教師で、障害児の機能回復訓練に関して幾分かでも、知識、経験があるわけではない。障害児教育を疎んじる市教委の姿勢が如実に出ている。さらに、みどり学級（小・中の部）施設管理は市教委管轄だが、成人・乳幼児部は社会福祉担当であり、乳幼児部に人手が必要ならば、福祉から職員が派遣されなければならない。社会科教師の小川先生を市芦から切り離して配置する必然性はまったくない。ただ、強配という市教委内部の決定が先行した中で作り出された受け入れ先である。

六人の先生のいずれの異動をみても、理の通ったものは一つとしてない。市教委が兵庫県教委とも結託しながら、無理矢理受け皿を作って当てはめた強制異動である。そのため、教育職から行政職へという、職種の変更が、先行した鈴木先生に対する強配と同じことが強行されている。

記者会見で市教委は「個々人の適性を考慮し、検討を重ねて」異動を決めたというが、「市芦つぶし」のための教師定員削減――十一名削減――に、なりふり構わず受け皿を探したのである。

## 警官に守られて校長前田　職員会議に出席

六名に対する辞令交付が行なわれているその時、市芦では校長・教頭が市教委職員数名と車に同乗し、警官に守られた学校に一〇日ぶりに登校してきた。ただちに職員会議が招集され、一切の手続きを無視し、職員の意見を全て抹殺して管理職権限のみを強化した「職員会議規定」を発表した。そこには、前代未聞の職員会議で討議された内容を公表してはならないという恫喝以外の何ものでもない守秘義務の一項がある。

「規定」改悪と合わせて、この間の市芦つぶしに抵抗してきた教師の多くを意図的に担任から外し――持ち上がり担任まで外す――生徒との関わりの少ない係に配置し、非組合



員や校長教頭に近づいた教師を中心に部長・主任を組んだ「任命制主任」の校務分掌表を発表した。校長前田・教頭井上は、一斉にあがる教職員の抗議の声を無視し、名指しで「あなたとは話をしません」と捨て科白を残して会議を終ろうとした時、同盟青年部・子ども会の子どもらが、「進学保障つぶし」に抗議し、話し合いを求めた。この要請に対し、校長は警棒を抜いた武装警察官の校内立ち入りで応えるという暴挙を行った。しかし、青年部員らの整然とした抗議行動に刑事弾圧が失敗したとみるや、管理職は官憲と市教委に守られてまたも逃亡したのである。

## 学校機能マヒの「市芦改革」

校長前田、教頭井上の職場放棄によって学校の機能はマヒし続けている。四月一日、一方的な改悪を押しつけたまま学外に出て行ったままである。四月九日の新学期開始間近になってもその準備は完全にストップしている。校長と共に逃亡した教頭井上は、校外から夜更け、学年主任に電話を掛け指示を出すという異常ぶりである。管理職が校内の職務を放棄しているのであるから、学年主任が指示を受けても、実際には何一つ進められるものではない。組合敵視に走る余り、市教委・管理職は、学校そのものを〝私物化〟しているのである。

両管理職は、「すべて管理職がやる」と教職員、父兄に豪語してきた。その結果が現状である。教科書購入の指示が生徒にない、教師用の教科書さえない。校長前田が大幅な選択制カリキュラムを強行導入し、多くの生徒の反対意見を市教委命令だと恫喝しアンケート（どの科目を選択するか）をとったままで、生徒一人ひとりの科目は決められていない。生徒も教師も一体どういう教科・科目を授業・受講するのか不明のまま放置されている。教頭・校長が不在のまま握りつぶしているのであるから決められるはずはない。

その後、管理職は教科会議を無視して、各教師の教科分担・学年・持ち時間数まで一方的に命令し、なお且つ組合員には意図的であろう、一人三～五科目で週一八時間も持つというコマギレの教科分担を命令している。組合憎しによる作為の結果、時間割が組めず、新学期初日の九日は、二、三年生は自宅待機という異常事態となった。そして、新学期がはじまっても教科書が未購入のため、自習が続いているのである。

## 今後のたたかい

すでに昨秋には鈴木・河村・深沢先生の不当処分撤回の訴えが市公平委員会に提出されている。市教委のズサンな対応で審理が遅れているが、五、六月には公開審理に入っていくと思われます。そして、今回の六人の強制配転処分撤回の不服申立ても四月二十一日には揃って提出されました。今後、三人に対する処分と今回の六人に対する処分を相互に組み合わせた審理廷闘争が志向されてゆかねばなりません。その中で、市教委が市芦弾圧を基軸に「芦屋の教育」をどのように改悪しようとしているのかを暴露し、大衆のものとしてゆかねばなりません。

前述したように、管理職そして市教委は市芦内でいかなる混乱が生じても、生徒に甚大な被害がふりかかろうと平気です。ただ、ただ管理強化のみです。そのような中で組合活動が展開されてゆかなければなりません。その時、市芦内・外での闘いが呼応し、深められていくことが緊要な課題であろうと考えられます。そのため、「市芦救援会」の活動が一層強化され〝芦屋の教育〟を守る諸階層と連帯した取り組みが模索されなければならないと考えられます。さらなる救援会活動強化のため、会員諸氏の御支援を御願いいたします。

# 3・31総決起集会報告―強配者六名の決意表明

三月三一日午後五時すぎより芦屋市教委前において、最後の抗議総決起集会が持たれました。もどり寒波の風が吹く中、会場には一〇〇名を越す支援の輪が作られた。県下各地の労働者、芦屋市民、卒業生、父母らが、二七日正午より抗議ハンストに突入した市芦分会員たちを包んだ。市芦分会員たちは闘争の疲れも見せず、多くの支援の中、元気な姿で集会を組織していく。集会は、救援会の玉本会長の怒りにみちたあいさつに始まり、強配された六人の先生から力強い決意が表明されました。抗議のハンスト行動は三十一日でおくが、四月一日からあらたな闘いが待ち受けており、そこに向けて果敢に挑んでゆくことが参加者一同のシュプレヒコールで確認されました。

六人の先生の決意表明を誌上で受けることによって、六人の先生の処分撤回を加え市芦反弾圧闘争のさらなる展開を期したいと思います。

## 怒りをもちつづけて闘い抜きましょう

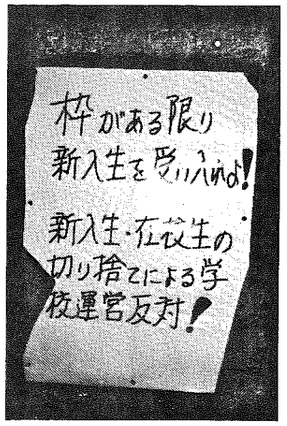
玉本　格

みなさん、ご苦労さまです。

すべての生徒をひとりひとり見つめ、励まし、大切に考えるのが、ほんものの教師たちの仕事であります。そのことは、もっとも苦しみ悩んでいる生徒や親たちを見逃すことのできない教師でなければできない仕事なのです。

今や、全国的に「障害生徒」の高校への進学保障運動が盛りあがりつつあります。東京では、つい最近、定時制高校はもちろんのこと、全日制高校への進学を認められた重度の「障害生徒」が二名あります。

大阪でも数年前からあちこちで運動がすすめられています。神戸でも先日、〝えんぴつの家〟で勉強した「障害生徒」二名が定時制高校に合格しました。現在見違えるように変わってきています。




これまで市立芦屋の教師たちや、運動団体の方々のすすめてこられた進路保障運動が原点となって、わたしたちは励まされ学んできたのです。そのすばらしい市立芦屋の教師たちを、問答無用で切り捨てようとする権力の笠を被った者に、果たして人間の心のかけらでもあるのでしょうか。

学校というところは、すべての教師が一丸となって生徒や親たちの側に立たぬかぎり、ほんものの教育ができるはずはありません。

それなのに三十三人もの受験生徒を、定員内にあるにもかかわらず冷酷にも不合格として切り捨て、姿を隠してしまった校長や教頭、その上、修業式当日になっても生徒たちの前に姿を見せず教育放棄をしてはばからぬ管理職たち、その背後からあやつる教育長たちの雲がくれ……。

わたしたちは、この教育不在、人間不在の敗戦前にも似た独裁的行為、その暴挙を絶対に許してはなりません。

寒い中、みなさまの熱烈なご支援、ほんとうにうれしく思います。総力を挙げて、共に闘い抜こうではありませんか。ありがとうございました。



## めっちゃはがい

麻田　利子

教育委員会指導部学校教育課からお呼びがかかりました麻田です。この間、いろいろ考える事があったんですけど、二十日に三十三名の子が落とされて、同盟の子が、いっぱいステッカーを学校に貼っているんですね。それにはありとあらゆることが書いてあり、あらゆる所に貼ってあるわけです。「校長逃げんなよ。」とか「出てこい」とか書いてあるわけなんですが、その中で自分の気持を表わしてるもんいうたら、子供の言葉を借りるならば「はがいーなあ。たいがいにせえよ」そんな感じですね。子供とはがいさを共有しもってしばらく山からおりたいと思います。これからもよろしくお願いします。

**校内各所に貼られたステッカーの数々**

子どもいじめて楽しいか
そんなに出世したいんか
血の一てきまで斗うぞ
ムラの子の根性みしたるで
あたしらも　高校にいきたいんじゃ
校長・教頭市芦やめろ
人間ができとらん
ほんまに悪い人間や
弱い者泣かして　おまえらはずかしないんか
できる子ばかり大事にするな！
おろか者
村の子は教育受ける権利ないんか　うそつき

## 〝汚ない奴〟で結構

石橋　幹夫

石橋です。教科は理科を教えていて、この度、教育委員会の同和教育課に強配で飛ばされました。九月ぐらいから、いろんな攻撃があって、その中で管理職は最初一四名ぐらい強配で飛ばすって言ってたのが、終りのほうになったら、九名ぐらいみたいな話になって、これやったら僕はその中には入らへんのちゃうか、九名なら、理科の教科では、分会長をやっておられる深沢先生がまず強配されるやろ、しかも、懲戒処分をくらっているんだから、と思ってまして、そういう読みを勝手にしてまして、安心していたというか、余裕を持っていたわけです。ところがフタをあけてみるとこんな事態になっておりまして、私の読みが大変甘かったというか、私の読みを見透されたというか、そんな感じです。（甘い、甘いの野次あり）

実は、僕もリレーハンストに入ったわけですが、その時は、まあ気分も軽く、深沢先生以下何名かが強配されるやろうと、残って頑張る僕自身としても抗議するために一日ぐらいやったら細身の身体でも、ハンストに入れるやろうかなと思っていました。僕がハンストに入ったその日に鈴木先生の方から下の庁舎内に内示が貼ってあるぞといった連絡があり、そこに僕も強配メンバーに入っていることを知らされたわけです。残留者の闘いとしてのハンストが、当事者のハンストになってしまいました。

その日、家の方へ書留速達が来てまして、他の先生はそんな連絡だとわかってましたから事前に拒否されたんですけども、僕のとこ

ろは嫁さんが受けとってしまっていました。その書類がこれです。（胸ポケットから引っ張り出し、片手を挙げて会衆に示す）これが多分、市教委・管理職のいう、内示だろうと思うんです。けれども、見てもらったら分かるように、校長印が押してありません。普通、このような書類には校長名を書き、校印を押すものなんでしょう。それが押してないわけです。何故かと言えば、校長前田が学校に来ず、市教委幹部ともども逃げまわっているからなんです。ただ校長前田のうまくない字で、書いてあるだけで、これが本当に公文書なのかという声さえ出てくるくらいに、ズサンな代物を送りつけてきたわけです。そして、四月一日、十一時に市教委へ出て来いと書いてあるだけです。このようなズサンな紙切れ一枚で行かざるを得ないというのは、僕にとって非常に残念というか、非常に気分が悪いというか、腹立たしいものであります。

今の教育長松本寿男は、西宮市に住んでいて芦屋市内のマンションの値段を高くすると広言してるそうです。そのためには、〝汚ないものは排除する〟ということで、この男の目から見れば、市芦の教育の中味、つまり今まで僕らが積み上げてきた生徒との出合いは、「汚ないもの」、「排除するもの」としてしか映っていないようです。そんな考え方に基づいて今回の六名の教師の強配もあるだろうし、三十三名の入学者不合格があったと思います。でも、僕はこの男の言う〝汚ないもの〟を大切にして〝汚ない男のまま〟教育委員会内部へ飛ばされようと思っています。まあどこまでやれるかわかりませんけど、きばってみます。

# 私の起点となった「事実の重さ」

滝山　昌彦

社会科の滝山です。二回目の強制配転で、また同じく社会教育文化課という所にとばしよるわけです。聞いたのは二八日の昼すぎだったのですが、僕はそれほどのショックがなかったのは、私が図太いのか、勘が悪いのかわかりませんが、また同じ所かという感想を持ちました。七年前の強配では十二指腸潰瘍で二回入院してて、現在もまた同じ病気になっとるわけで、身体が資本なんで頑張らないかんなと思ってるわけです。

昨夜は皆に悪かったんですが、早目に家に帰らしてもらってあれこれと考えてました。市芦に来て一四年たつわけですが、教師にさしてもらった学校だと思ってるわけです。一番最初に出会った子供と親の事がやっぱり頭に浮かんできます。

それは最初の、進学保障生が三年の時、僕は初めて副担任でしたがクラスをもつことになり、その時初めて家庭訪問した家のことんです。その家に行きますと、かつて芦屋の浜に土管があって、そこで雨露をしのぎながら生活してて、廃品回収の荷車を押しながらその上に積んだダンボールの中で子供を育ててきた、という話を初めて見る若造の僕に話してくれたわけです。「私には生きとったらあんたぐらいの息子がおるんです」、と僕の顔をじっと見ながら延々とお母ちゃんが話してくれたわけです。そのお母ちゃんと親子ほども歳が離れていたお父ちゃんが、その子を産むにあたってお母ちゃんが堕そうかと悩んでいた時に、「わしは歳いってて早く死ぬねんから、お前はその子を産んでおかなあかん」と言うて、それで決心して産んだ子なんですよ、と私が受けもってる娘の話をされたんです。

その当時の僕は、まずそういう生活の「事実の重さ」にガーンときました。衝撃を受けたと思います。その夜、家庭訪問した母親の



聞き書きをノートに何頁も書いたことを覚えています。

そんな出会い方をして、自分としては予想もできないような貧困生活の「表面」にまずおどろいていただけだったんでしょうが、大切にしてきました。その後、自分が初めて担任したクラスで、アルファベットが書けない、カケ算の九九ができない、授業中しょっ中抜け出すという生徒に出会って、ずっと追いかけっこをしてました。そしてその子のほんまにしんどいとこを聞き出すまでに一年かかってやっと奨学生集会に連れ出して聞き出した時に、あふれるように自分の想い、くやしさをぶつけるという場面に出会ってきました。

やっぱり、自分の無知・恥を、「恥を恥として知る」というか、知らんことはダメなことなんやと思っていたのが、子供や親との出会いでわかってきたと思うんです。

それを一つ一つ、そういう生徒たちの証言を、要求を胆に銘じていくことでしか僕はこの一四年間市芦におれなかったと思うんです。とりあえず山をおりるにあたっても、そういう自分の心にしみこんだものを持っていくしかないと思います。

この九月からほぼ半年間、すさまじいいきおいで弾圧がかけられてきたわけですが、その中で生徒たちも果敢に闘ってきました。そこでのある場面を紹介して話を終えたいと思います。

奨学生と管理職の交渉の中で、井上教頭がこんな話をしたんです。「人事異動というのはどこにもあるんです。私もかつて担任を途中でおろされ、泣きくれて抗議しに行ったこともあった。しかし、いまではそれは大変恥ずかしいと思う」と言いました。間髪いれず、「そう思ったことは恥ずかしいことなんですか。恥なんですか」と生徒が切り返しました。

四月一日から、私の目の前からそんな生徒はいなくなります。しかし、新しい職場でも、そんな生徒の側に立ったところでやってゆきたいと思っています。

どうも本日はありがとうございました。

# 自分の生き方は自分で決める

小川　文夫

御支援ありがとうございます。市芦分会の小川です。社会科を担当しています。市教委学校教育課へ来いということです。教科の人数の関係で僕自身が強配される、飛ばされるということを考えていなかったわけです。滝山先生が一番狙われとって、飛ばされるなら彼であるという大方の予想から、僕は残る方のしんどさをかかえもって行こうと心に決めていたわけです。現在の心境は非常に戸惑っているというか、整理がつかない状態です。それよりも非常に腹立たしいというか、くやしいというか言葉にならない怒りを覚えます。無念です。

僕は市芦で教師を始め、十二年間お世話になり、四回の卒業生を送り出しました。十分なことがやれてきたなどとは思っていません。たくさんのすごい先輩教師がおられます。その先生方の末席に座らしてもらって、自分なりになんとか出来ることを、少しずつ積み上げてきたわけです。今このような立場に立たされていろんなことを思います。特に二回り目に三年間担任をした十七回生は、僕から吉岡先生に頼みこんで一緒に担任をしていただいた回生です。その時の卒業生が今日も何人か駆けつけてきてくれています。また、昨夜も遅くまで子連れで激励に来てくれました。その三年間というのは僕が教師としてやっていく上での大きな土台を築いた。築いたというよりは、吉岡先生、担任をした子供たちから築かしてもらった三年間でした。教師とし

ての仕事をしていく喜びを身をもって知った日々でした。ただ吉岡先生からはいつも「三年間一緒にやってきたにもかかわらず私から何も学んでいない」と、いつも叱られているわけですが……。少なくとも教師として一生をまっとうしていく自信みたいなものをつけた三年間でした。

僕は今まで自分の生きる道を人からさしずされたり、曲げられたりしたことはないし、自分の志を曲げることはなかったつもりです。その事だけは自分が生きていく上での生き方であったし、芯みたいなものでした。

今回権力によって一方的に自分の生きる道を閉ざされ、切られた。このことは何としてもがまんできないし、許せない。どないしたろかという気持でいっぱいです。以前の僕でしたら、気分悪いし、「ヤメタ」ということになってしまったと思うわけですが、家族もいるし年もくってきているので、そういうわけにもいきません。そんな事は思わんでもええんだろうと思いますが「情ないなあー」と思ってしまいます。パッとやめる方がええかっこみたいで…（笑）それに今やめたらそれこそ向こうの思うつぼです。飛ばされた先で何かができるという幻想は持たないわけですが、自分の今までの生き方だけはくずさないで、しぶとくがんばり続けていこうと思っています。

この間の闘争中、ハンストの時、いろんな人達に激励、御支援をいただきました。ありがとうございました。これからも皆さんの御支援をよろしくお願いします。

## 病いに倒れた父が言います
# 「今辞めたら相手の思う壺や」と…

吉岡　治子

吉岡です。一年生の生徒が一番最後の授業の時に、「二年になったら、一番はじめに何か彫りたい」といったので、私は、のみを全部研いで、新聞紙とか、新聞紙の間にはさんである広告の紙なんかで、きれいにのみの刃をつつんで、美術室には大きな机があるんですけど、そこの作業机みたいな所にちゃんと置いて、あと、朴の木を注文したらいいようにしてあって、今こんな所に、こんな前に六人で立ってる場合じゃないんですけど、六人で立ってるんです。そのことは、すごく口惜しいんです。

市芦で一三年間いました。その一三年間というのは、たとえば女の教師が最初の方にぶつかることっていったら、子供を生んだり育てたりすることと、働くことがぶつかっていくんですけども、後の方は、自分とか、自分の親なんかが、私が働くことを身いっぱい支援してくれた親が、年とって、老いて、病に倒れていって、そういう中で、そういうことと背中あわせになりながら、働いてきたと思うんです。

そういう中で、私も十二月のはじめに母を失い、また父も病気になっていって、そういう中で、今、仕事を続けている訳なんです。

今度、こういう強配に自分が遭遇しなければならなくなって、今、私の強配先といわれている所の勤務時間が二時から一〇時で、本当にもし一〇時に済んだとしたら、家の戸をあける時間というのは、午前〇時前になっていくだろうと思うんですけども、そういう生活になっていく訳です。

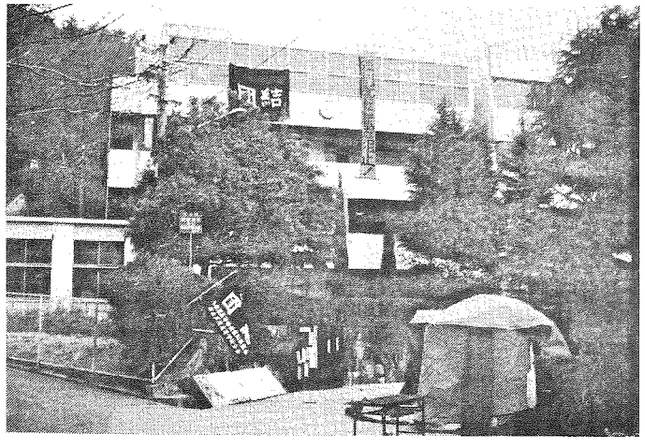
その時私は、やっぱりそういう場所にあえて私を配転していくということは、私に働いてはいけない、働くべきではない、やめ、といっていることと一緒だと思うんです。私はその新しい職場がいやなんでも何でもなくて、もし自分が元気だったら精一杯やりたい場所でもあるけれど、教師を続けたいということとはまた別で、そういう思いも一杯なんです



けども、やっぱり自分の体の状態もあり、なげたらいいのかとてもむずかしくて、そういうことは百も承知で、名指しで私をそこへやっていった人間に対して本当に怒りを感じます。

私がいいたいことは一つだけで、こんな目に会うのはいややということと、教師を続けたいという、その一つだけです。

末永い御支援をおねがいします。



# また飛ばすのか 2度目の怨念を忘れるな

森村　啓一

英語科の森村です。図書館に強制配転されました。七年前にも同和教育課に強配されて、今度で二度目ということです。二度にわたるくやしさがあるわけです。

前の時もそうでしたし、今もそうだけれど、うちの学校は三年間クラス替えをしないで担任してゆくのですが、たかだか一クラス三十名の生徒であっても卒業してゆく時には二十六〜二十七名になってしまいます。入学してきて、せめて高校だけは出て欲しいという親の願いの中で、子供は自分と格闘しながら学校に来ているのです。けれど、それでも一年から二年、二年から三年に上がる時に四〜五人の子供が学校から去っていく。その彼らのくやしさを背負いながら、三年生の担任の時、分会執行委員になりました。生徒の卒業したいという気持ちに対して、教師として何ができるんかという思いからでした。そこでまず、生徒の教育権を守るためには自分たちの権利を守らないといけないというふうに、生徒の現実につき動かされて執行委員をやったその時に飛ばされたのです。

前回は多数の方の支援の中で一年間で現場復帰ができました。六年たった今、本校に来てからの三度目の卒業生を出そうとする中、副分会長として九月からの想像を絶するような攻撃に、自分たちがやってきたことが正しかったからこそ弾圧を受けているんだという確信に似たようなものを持って今日までやってきました。

卒業できなかった者たちのくやしさというのは今も僕自身持ち続けているわけです。しかし、今年はその前に三十三名の子供が入学すら許されずに、落とされてしまった。その子供たちの顔すら見てないのですが、その子供たちの入学できなかったくやしさというものは、僕が担任しながら卒業させきれなかった子供たちのくやしさと重なってきて、それを自分自身のくやしさとして、昨日一日、最後のハンストに入りました。新しい職場に行かされても、そのくやしさをずっと持ち続けることが僕の闘いになるんだと思っています。

この二度にわたって僕をとばした男は、僕たちを飛ばすことで校長になった前田和夫と井上教頭ですが、彼は僕が前回飛ばされた時、

同和教育課の課長で、「一人一人の子供を大切にする同和教育は一番大切なものです。」と言っていた男なのです。はたして彼が本当にその時、そう思っていたのか、それとも情勢だけ見て世の中を渡ってゆく男であったのかということは、これから僕の闘いの中で追求していきたいと思っています。これは職場が替わったとしても自分に課せられた闘いだと思います。

松本教育長、前田校長、井上教頭の三人は最後まで許すわけにはいかないし、皆さんと一緒に、四月一日から職場は替わっても市芦分会員の一人として頑張っていきたいと思います。

## 活動日誌〈抜粋〉　1987. 3. 12～4. 9

3・12　市教委が石橋・長瀬先生に文書訓告処分。9月と12月のデッチ上げ「無断欠勤」を理由とするが、処分対象日を間違えるという杜撰さ。

13　芦教組（百名）「進学保障制度存続」要求で市芦管理職に申し入れ。教頭退去命令を出すが、代表者に対し「原則的に存続」と答える。

19　校長・教頭が合否判定委員（任命制）の教師を学外に一晩監禁。「一切口外しない」と誓約書を委員に強要。

20　定員内で33名の不合格者を出す。校長・教頭はその後一〇日間逃亡。合格者招集にも両者姿を見せず。緊急抗議集会。芦教組抗議文提出。三先生、反論書を市公平委員会に提出。

21　大量不合格者抗議ビラ各戸配布（23、24、25と続行）

23　修業式にも管理職は姿を見せず大混乱、修業式は結局行なわれず。同盟青年部、子ども会の対市教委・管理職抗議行動が連日取り組まれる。分会抗議、市教委に突きつける。芦教組と市芦分会の抗議集会。

24　教育長・管理職居直り記者会見

26　教育共闘会議

27　芦教組強制配転抗議集会　市芦分会、精道小学校前で抗議ハンストに突入。以後31日まで市芦校門前で決行。

28　市芦救援会通信№4発送。内示もなく6名の教師が強制配転。

29　市芦校門前抗議集会（「強制配転阻止・大量不合格撤回」）。駅・各戸ビラ配布。

30　芦教組と市芦分会抗議集会。

31　県高支部、強配抗議集会に参加。市芦分会抗議総括集会。

4・1　辞令交付。管理部長が「異動に人権問題は関係ない」と発言。異動について一切の説明せず。

2　校長・教頭が市教委職員・警察に守られて登校。職員会議規程を改悪し、任命主任制の校務分掌を発表。子ども会の話し合い要求に対し、警官導入でこたえる。管理職逃亡。

3　法対会議。

4　教頭が各教師の授業分担（担当科目、学年、持ち時間）を一方的に指示。

6　教育共闘会議。

7　管理職、時間割編成を一方的に指示。市教委・管理職、学校内に掲示されていた生徒の抗議文を無断で破り捨てる。

8　意図的な職員机配置変更。新カリキュラムの生徒選択決まらず。教科書は届かず、生徒名簿もなく、管理職の横暴により学校機能マヒ。

9　時間割が組めず、二・三年生は家庭学習。

# 市芦救援会会則

一、本会は、「市芦救援会」といいます。

二、本会は、市芦反弾圧闘争に関わる被処分者の救援を目的とします。

三、本会は、本会の目的達成のために必要なオルグ活動・カンパ活動・救援会ニュースの発行等の諸活動を行います。

四、本会は、本会の目的に賛同する個人によって組織します。

五、本会は、本会の活動を推進するため、役員と事務局をおきます。

| | | |
|---|---|---|
| （1） | 会長 | 一名 |
| （2） | 副会長 | 一名 |
| （3） | 幹事 | 若干名 |
| （4） | 事務局長 | 一名 |
| （5） | 事務局員 | 若干名 |

六、本会は、役員を総会で選出します。

七、本会は、総会・幹事会・事務局会議をもちます。

（1） 総会は、原則として年１回開き、各種報告と協議を行います。

（2） 幹事会は、必要に応じて開き、本会の運営事業の推進について協議します。

（3） 事務局は、総会・幹事会の決定に基づき、本会の実務運営を行います。

八、本会は、本会の会計を、会費および寄付金をもってあてます。

会費は、月額１口 300円とし、口数は任意とします。

九、本会は、事務所を下記の住所に置きます。

兵庫県芦屋市剣谷9　芦屋市立芦屋高等学校教職員組合内（〒 659）　☎ 0797-32-1131

十、この会則は、1986年10月20日から施行します。

（1987年４月25日　一部改正）

〈役員〉 会長　玉本　格（えんぴつの家代表）

副会長　玉田　勝郎（関西大学助教授）

事務局長　滝山　昌彦（市芦分会）

〈郵便口座振替番号〉　神戸 7-21488

〈被処分者〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 河村　央也 | 1986年10月１日 | 停職１ヶ月 | |
| 深沢　忠 | 1986年10月１日 | 停職１ヶ月 | |
| 鈴木　紀之 | 1986年10月１日 | 強制配転 | 学校教育課　（青少年センター内　63高校総体準備事務局） |
| 麻田　利子 | 1987年４月１日 | 強制配転 | 学校教育課　（県教委体育保健課に１年間出張研修） |
| 石橋　幹夫 | 1987年４月１日 | 強制配転 | 同和教育課　（上宮川文化センター学力促進学級担当） |
| 小川　文夫 | 1987年４月１日 | 強制配転 | 学校教育課　（肢体不自由児施設みどり学級） |
| 滝山　昌彦 | 1987年４月１日 | 強制配転 | 社会教育文化課　（市民センター内　文化財資料室） |
| 森村　啓一 | 1987年４月１日 | 強制配転 | 図書館 |
| 吉岡　治子 | 1987年４月１日 | 強制配転 | 同和教育課　（上宮川文化センター学力促進学級担当） |

## 加入申込書

年　月　日　No.（　　）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ふりがな<br>氏　名 | | 年<br>令 | | 自宅<br>住所 | 〒（　　）☎ |
| 勤務先<br>名称 | | | | 勤務先<br>住　所 | 〒（　　）☎ |
| 会　費 | １ヶ月につき（　　）口、計（　　）円 | | | | |
| | （　　）年（　　）月〜（　　）年（　　）月 | | | | |

# 集　会　決　議

３月28日、芦屋市教育委員会は、市立芦屋高校の６名もの先生に対して、市教委への強制配転を行ないました。その人選には市教委の意図が露骨に反映されています。それを貫くためには、教師の人権も生徒の教育権も一切かえりみられてはいません。

麻田・石橋・小川・滝山・森村・吉岡の６名の先生は、いづれも市芦において十年以上の年輪を積んだ人ばかりです。十年の実践を通じて確かな手応えをつかみ、教師こそ我が生きる道と心に決めてきた人ばかりです。その６名に対して今回の強制配転は教師としての首切りにほかならず、人生の軸を奪うことを意味しています。中でも吉岡先生に命じられた配属先は勤務時間が２時から10時までというもので、母を失い父もじぶんも病魔に冒されるという苦境の中で家庭をかかえながら教師を続けてきた先生を退職に追い込もうという意図が明らかです。単に不当な人事というにとどまらず、人間として許しがたい犯罪だと言わざるをえません。

教師べらしはまた、生徒べらしへと直結していきます。市教委と市芦管理職は今年度の入試で、33名もの生徒を切り捨てるという暴挙を行ないました。その狙いの一つが、すでにたくらまれていた今回の強配の帳尻合わせにあることは明白です。生徒の親は、子供には自分たちの時以上の学習の機会を与えたいと思うものです。このような親の願いを踏みにじること、見事な実践を積み上げてきた教師を教壇から追い払うことが何の「教育改革」でしょうか。

公立学校は、すべての市民の願いを実現する場であるはずです。金や力のある者の役にたつ将棋の駒の工場ではありません。しかし、権力指向のかたまりのような教育長、出世のことしか頭にない管理職には、そのことを理解する能力がありません。エリート養成機関へと市芦を変えていくのに邪魔になる教師を狙い撃ちにしたのが今回の強制配転です。人選にあたっては教科のバランスすら全く考えに入れられておらず、これでどうやって授業が組めるのかと思うほどです。

わたしたちは、「教育改革」をかたった教育破壊に抗し、市芦の内外に分断されてもなお、今までの市芦を守りぬくことを、ここに決議します。

１９８７年３月３１日

３．３１市芦つぶし・強制配転抗議集会参加者一同